論文

ヒューマンライブラリーの試み
―異文化理解のための人間図書館―

林　伸一

1．はじめに

ヒューマンライブラリーは、障害者や社会的マイノリティの人などに対する偏見を減らし、相互理解を深めることを目的とした試みである。「ヒューマンライブラリー」は、「人を本に見立てて読者に貸し出す図書館」という意味で、「人間図書館」または「リビングライブラリー」とも呼ばれ、「読者」と「本」とが一対一で対話をする点が特徴とされる。(『ウィキペディア』参照)

ヒューマンライブラリーは世界各地のボランティアや公的機関などの協力を得て、フィンランド、イタリア、オランダ、ポルトガル、スロベニア、オーストラリア、タイ、ルーマニアなど、世界 70 カ国以上で展開されていると言われる。その活動は日本にも及び、長崎県社会福祉協議会の協力のもと「ヒューマンライブラリーNagasaki」が年に数回開館され、相互理解を深める場として多くの人に利用されているとのことである。SNS でいつでも簡単につながり合える現代に、人と人とが介して語り合う場が生まれている。こうしたアナログなコミュニケーションが、いまの時代とても新鮮に感じられるのであろう。

(http://tabi-labo.com/246396/humanlibrary/参照)

最近の例では、明治大学国際日本学部横田ゼミナールでも、2016 年 11 月 27 日に「Meiji Human Library」を開催している。2016 年度のテーマは「今日しか読めない本(ヒト)がいる」で、以下のような呼びかけがなされ、300 人以上の人が参加したとのことである。

本と書いて「ヒト」と読みます。

・来やすい場として様々な人に来て欲しい

・「読者」の方、「本」の方、スタッフ、全員にとって良い経験となり、その１日で多くのものを得ることができるイベントにしたい

・本は表紙を見るだけではわからないので、中まで読み気づきの場としてほしい

という気持ちを込めてこのテーマに決定しました。

時間/予約不要・参加無料！　(http://meijihumanlibrary.jimdo.com/)

左の 2015 年の明治大学国際日本学部横田ゼミナール主催の「Human Library」のポスターがホームページ上に公開されており、そこには、「生きてる本を読んでみた」と書き込まれている。

別のサイトでは、次のように解説されている。

どれだけ多くの本を読んで得た知識よりも、たった一人から体験談を聞くことの方が新鮮で刺激的で、インプットが大きかった。そんな経験をしたこと

はありませんか？ここで紹介する図書館がまさにそれ。なぜって、蔵書は本ではなく、さまざまな知識や経験をもった人間だから。

経験や個性のある「人」を貸し出すヒューマンライブラリー

蔵書は本ではなく、あらゆる個性をもった人――。

（http://tabi-labo.com/246396/humanlibrary/参照）

2．「ヒューマンライブラリー（人間図書館）」のはじまり

2000 年春、コペンハーゲンで毎年開催されるヨーロッパ最古の野外ロックフェス「ロスキルド・フェス」のイベントの一環として、開館したのが始まりとされる。野外音楽フェスに図書館とは、いささか妙な響きではあるが、ロスキルド・フェスはオーガニックフードを扱ったり、ゴミ問題に積極的だったりと環境に配慮したイベントとしても知られている。フェスの楽しさと同じように環境や社会の問題に向き合うこの場で開館することには、大きな意味があったのであろう。（http://tabi-labo.com/246396/humanlibrary/参照）

2.1　ヒューマンライブラリーの仕組み

ヒューマンライブラリーの考案者であるデンマーク人の Ronni Abergel 氏は、当初より以下のようなメッセージを送り続けてきた。

本を表紙だけで判断してはいけない――。

蔵書となる一人ひとりは､社会的にみればマイノリティの人たちかもしれません｡ともすれば、普段から偏見の目で見られることもあるでしょう。

けれど、この図書館では彼らの話を聞くうえで大切な 2 つのルールを設け、利用者は貸出前、誓約書にサインをするとのことです。

ひとつは、“本”を大切にあつかうこと。そしてもうひとつは、敬意をもって接すること。貸出し条件は、たったこれだけ。

表向きは「借り手」の利点ばかりに思うかもしれないが、実際は「語り手」にも少なからずメリットがあるのがヒューマンライブラリーのいいところとされる。

本である語り手は、自分に興味を持ってくれた人に対して話すことで、理解し合えるチャンスを広げることもできる。

「どうせ言ってもわからない…」そうした思いから話す側も同時に解放されていくと言われる。公式ページでは、これまで本となった多くの人々がその利点を挙げている。

（http://tabi-labo.com/246396/humanlibrary/参照）

3．ヒューマンライブラリーの理念

2012 年に群馬大学社会学科坪井ゼミでは『ココロのバリアを溶かす―ヒューマンライブラリー事始め』を発行しているが、そこには次のようなヒューマンライブラリー（HL）の理念が掲げられている。

・生きている「本」と読者の対話を通して、多様な生き方を認め合う、多様性に対して開かれた社会の実現を目指す

・HL は基本的に共感性を重視した非営利活動の精神が重要であり、特定の団体や企業の利益を生むための行動では、その基本的な理念である「多様性」

という本旨をゆがめてしまう。
・差別や偏見のある社会に対して問題意識をもち、すべての人が平和に暮らし、お互いに尊重し合える社会の実現を目指す。

４．看護専門学校での実践報告と分析

本稿では、前項で紹介したようなイベント形式のヒューマンライブラリーではなく、看護専門学校での「人間関係論」の授業の一環として実施された「人間図書館」の内容と分析を開示し、検討する。前項の群馬大学社会学科坪井ゼミ(2012)でも「授業の一環として学校で開催する」可能性を示している。

4-1. 中国からの留学生二人を「本」とした場合の対象者の内訳

「本①」：大学院修士２年(24 歳・女性)日本語学習歴５年：日本滞在１年９カ月
「本②」：大学院修士１年(24 歳・女性)日本語学習歴５年：日本滞在９カ月
二人とも日本語能力 N1（１級）レベルで、日本語の研究を専門としている。
「読者」の内訳：看護専門学校の看護科１年の 44 名(18 歳から 38 歳の年齢の幅があるが、平均年齢は、22.1 歳)「人間関係論」の授業(一コマ 90 分)全 23 回の授業の 19 回目で実施。参加者「読者」としては、入学後二か月経過した時点で、実施。

4-2. 実施手順とねらい

「本①」と「本②」に一人 10 分ずつ簡単な自己紹介と自分の研究テーマについて話してもらい、参加者（読者）からの質問に答える形で進めた。一人の話と質疑応答で合計 30 分程度、二人で約一時間の活動を実施して、実施後に参加者に感想カードを記入してもらった。(注)
参加者（読者）は、二人一組のペアを作り、ペアで一問質問することとした。他のペアと質問が重ならないように「本」の話を聞きながら、複数質問を用意することとした。質問は、一問一答として、コミュニケーション能力を高める目的で進めた。また、ヒューマンライブラリーを構成的グループ・エンカウンターのエクササイズとしての実施の可能性についても検討した。

4-3. 参加者（読者）からの反応と内容分析

参加者のプライバシー保護のため氏名の代わりにアルファベットを用いる。

4-3-1. 初めてのヒューマンライブラリー体験

C:初めてヒューマンライブラリーというものをしましたが、とても楽しかったです。身近な人だとある程度、質問などしなくてもわかっているものですが、自分より年上で中国の方ということで、返ってくる答えがとても新鮮でした。きっと、自分とは年齢も性別も違う人の方が、新しい発見があるのではないかと思いました。(18 歳・女性)
L：人間図書館という活動は、とても新鮮であった。ごく一部の方ではあるが、不適切な質問をする方がいたのは、本当に残念だと思ったが、異文化交流を図ることは、自分の世界を広げる良いきっかけとなるので、ぜひ行いたいと思った。(27 歳・男性)
X：人間図書館を初めて体験してみて、とても面白いなと思いました。なかなか海外の方とお話す

る機会なんてないですし、皆それぞれ違う質問することでたくさんのことが知れて嬉しい気持ちになりました。日本語は難しいと言われていますが、とても上手に話せていましたし、本当に楽しい時間であっという間でした。(18 歳・女性)

f: 人間図書館を初めてしました。今日、来てくださった中国人の二人の方は、すごいと思いました。なぜなら、自分の生まれ育った国ではないところで毎日生活し、日本語は上手だったけど、まだ少し自信がないと言っていたのに、こんなに大勢の前で、みんなの質問に答えて、私たちに伝わるように一生懸命話してくださったからです。自分だったら不安だし、怖いし、絶対にできないとすごく思いました。とても堂々としていたし、先生に指摘されても、めげないところはメンタル強いと思いました。(18 歳・女性)

V: 人が本になる「人間図書館」は、名前も顔も知らなくて、初対面の人だから面白みがあるかと思いました。友達や知り合いでやると知っている内容が多いので、質問も限られてくると思います。(19 歳・女性)

ヒューマンライブラリー初体験の人がほとんどであったが、その中でも上記のように、C「楽しかった」L「とても新鮮であった」X「とても面白い」など好印象でとらえられたようであった。その中でもCの「自分とは年齢も性別も違う人の方が、新しい発見があるのではないか」との振り返りは、構成的グループ・エンカウンターの「異質なもの同士のぶつかり合い」という中に認知の修正・拡大を期待する点に通じるものがある。エンカウンターは、出会い、遭遇の意である。

4-3-2. 中国人との初めての対話体験

N:中国人の人と交流するのが初めてで、テレビや町で見る中国の人は話し方がきつく感じていたので、性格も怒りぽくて、せかせかしているイメージでした。ですが、日本語を喋っている二人を見ると、とてもやわらかく話しやすそうでした。彼氏の話になると盛り上がったりして、国が違っても同じ年代では、盛り上がるところも一緒だなと解りました。(26 歳・女性)

b:二人ともとても可愛らしくステキでした。中国の方との交流は初めてでしたが、日本語も上手で会話ができて、少しの間でしたが、いろいろ知ることができて、とても楽しかったです。(37 歳・女性)

h:中国人を生で見たのは初めてでした。字がきれいで日本語もお上手でした。住んでいる所は違っても、笑いのツボは同じでとても親近感がわきました。(18 歳・女性)

テレビなどでは、中国人観光客の爆買いや観光地でのマナー違反などが報じられることが多く、どちらかというと中国人をマイナスイメージでとらえる風潮が蔓延している。

そのような中で、Nの「テレビや町で見る中国の人は話し方がきつく感じていたので、性格も怒りぽくて、せかせかしているイメージでした」との印象があったのであろう。それが、本活動で「とてもやわらかく話しやす

そう」だというように認知が修正されたと言える。さらに「彼氏の話になると盛り上がったりして、国が違っても同じ年代では、盛り上がるところも一緒だな」と共通点も見つけ出している。ｈも「笑いのツボは同じでとても親近感がわきました」と心理的な距離が狭まったと感じている。

4-3-3.　中国人留学生の日本語力について

A：中国人の二人がとても可愛かったです。まだ日本に来てそんなに経ってないのに、日本語がとても上手だったので、すごいと思いました。日本に来た目的は特にないと言っていたけど、海外でバイトしたり、大学で研究したりとその勇気とやる気が本当にすごいと思います。（18 歳・女性）

E：中国人の留学生は、意外に日本語が上手でした。あまり話せない印象を持っていたので、びっくりしました。質問コーナーでも、天然みたいな回答で今日の交流みたいのは、楽しかったです。（18 歳・女性）

F：今日は、中国から留学してきた人が二人来ました。すごい日本語が上手だなーと思ったし、二人ともおもしろい人だと思いました。質問したことについて答えてくれたり、笑顔がとても可愛かったです。今日の授業は、とても盛り上がったし、楽しくできたのでうれしかったです。（19 歳・女性）

e：留学生の日本語がとてもお上手で、努力をされたんだろうな…私も頑張ろう！と勇気をいただいた。多くの国々の中で、日本を選んでくれたくれたことを嬉しく思った。「質問の時のスピードが速かったな」と後で気付いたので、次に同じような機会があった時には、聞き取りやすく、また理解しやすい言葉の選択、スピードに気付けるようになりたいと感じた。（31 歳・女性）

上記の他にも、留学生の日本語が上手だとする感想が多く寄せられた。「本」になってくれた中国人の二人は、本国でも 4 年間日本語を専攻し、日本でも半年間の研究生としての学習を経て、大学院に進学し、日本語の研究を専門としている。日本語能力試験でも、最高レベルの N1 を取得しており、大学内の J-CAT という日本語力試験でも上位 5 位に入っている。中国からの留学生の語学力に驚きを感じたのは、日本人の「日本語は難しいから、外国人留学生が日本語を流暢に話せるはずがない」とのビリーフ（思い込み）があると思われる。外国人留学生と言っても中国人の場合は、漢字という表記形式を共有しており、簡体字という字体の相違はあるものの意味の面で共通するところが多く、非漢字圏の学生に比べて日本語の上達が速いという背景がある。大学の日本語クラスでも上級レベルのクラスは、ほとんど中国・台湾の学生が占めている。

一方、中国人の二人の日本語がカタコトでたどたどしく、不十分だとする感想もあった。

4-3-4.　中国人留学生の日本語力不足について

H：今日は、中国人の方が二人来られて、研究内容を聞いたり、たくさんの質問に答えてもらいました。日本語がカタコトは、可愛いなと感じました。話が通じないのは大変だなと思います。（18 歳・女性）

T：留学生の方は、いい人そうで中国の人に対して好印象を持つことが出来ました。二人とも日本語を勉強して、地元から遠く離れた地で、言葉も完全に話せるわけでもないのに、暮らしてい

くのは本当にすごいと思います。僕自身、絶対に無理だと思います。また会う機会があったら、もっといろんなことを聞いて、中国のことをもっともっと知りたいと思いました。(25 歳・男性)

Y:中国人の留学生が来て、いろいろな話をしてくれてとても楽しかったです。日本語がたどたどしていたのが、とても可愛くて、もっと話してみたいなと思いました。質問のときに車のことを汽車と言っていて、最初何を言っているのかわからなかったけど、意味がわかって、日本と違うところがけっこうあるんだな〜と思いました。(20 歳・女性)

上記のHの「日本語がカタコトは、可愛いな」との感想は、日本語の不十分なところをむしろプラスの特徴ととらえて「可愛い」と評価しているわけで、肯定的な配慮と言える。日本語の不十分さを肯定的にとらえている。むしろYの「日本語がたどたどしていた」という日本語表現自体が問題視されるかもしれない。本来「たどたどしい」というシク活用の形容詞はあるが、「たどたどする」という動詞表現はないと思われる。日本語母語話者が必ずしも自然で規範的な日本語を流暢に話しているとは限らない例であろう。

Yは「車のことを汽車と言っていて、最初何を言っているのかわからなかった」を「日本語がたどたどしていた」の根拠として挙げているようだが、日本語で「自動車」のことを中国語では「汽車」というのは、母語による干渉の問題で、中国人の日本語学習者には、頻繁に起こりうる誤用である。同じ漢字圏だから漢字熟語もそのままの意味で通じるだろうとする「過剰般化」の例でもある。上野編(1997)、金(1987)、飛田・呂(1987)など参照。

Tの「言葉も完全に話せるわけでもないのに、暮らしていくのは本当にすごい」とコミュニケーションの困難さを乗り越えて、「暮らしていくのは本当にすごい」とプラスに評価している。

4-3-5. 中国と日本の文化差に関する気づき：異文化理解

B:中国と日本は地図で見るととても近いけど、文化や地域差が違ったことが面白かった。(18 歳・女性)

D:今日は、中国人の人の話を聞いて、質問もできて、本当に良い経験になりました。なかなか外国人の人と話をする機会がないので、楽しかったです。一番驚いたことは、中国の人の名前は、短いなと思ったことです。漢字二文字でフルネームだと知って、びっくりしました。中国は、隣の国なのに知らないことが多いし、ほぼ日本人と顔が似ているので、わからないと思います。また、機会があれば、話してみたいです。(18 歳・女性)

G:今日は、山大の留学生の方と交流することができました。なかなか外国の方と関わることがすくないので、中国と日本の違いを知ることができておもしろかったです。自分たちが質問したこと以外も、他の人たちが質問してくれたので、いろいろ知ることができました。違う国の人が日本に興味を持ってくれるのは、大変嬉しいことだと思いました。(30 歳・女性)

P:中国人の大学生の方の話を聞いて、やっぱ中国と日本の文化は違うんだなと思いました。でも、今日の授業で少し中国に興味を持ちました。どういう国かっていうのを調べてみたいなと思いました。(18 歳・女性)

c:二人は受け応えが、とてもストレートで自分の感情を素直に出しているなって思いました。日本人は、割とオブラートに包むことが多いので、感心しました。でも山口のことを最終手段と

か田舎って言われてショック…（27 歳・女性）
N: 私は、海外に行ったことがないので、留学することが本当にすごいなと思いました。交流できてよかったです。（26 歳・女性）

文化差として氏名の表記の問題がある。D の「一番驚いたことは、中国の人の名前は、短いなと思ったことです。漢字二文字でフルネームだと知って、びっくりしました」という気づきは、興味深い。ニュースなどで李鵬など「漢字二文字でフルネーム」の人物がとりあげられることがあるから驚くには値しないのかもしれないが、新聞記事をあまり読まなくなった世代には「漢字二文字でフルネーム」の人に対面すること自体が驚きであったのだろう。

c の「二人は受け応えが、とてもストレートで自分の感情を素直に出している」という印象を持ったようだが、逆に日本人同士の受け答えが「割とオブラートに包むことが多い」と自文化の特徴に気づくきっかけになったようだ。また、c の「山口のことを最終手段とか田舎って言われてショック…」というあたりも、日本の「配慮文化」に気づくこととなる。

4-3-6. HL のメリット（効用）：相互理解

J : 今日の授業では、中国の方に質問したり、様々なことを聞いて、色々なことを知ることができました。ただ本を読むだけでも頭に入らないことはないし、メリットもあると思います。しかし、人が本の役割をすることで、分からないことは深く質問できたり、その人の反応を実際に見ながら話を聞くことが出来て、より印象に残ったように思いました。（26 歳・女性）
K : 中国の留学生に二人で一つは絶対質問しないといけないという条件で、しかも質問がかぶるといけないということもあり、いろいろなことが聞けて、ふつうの自己紹介よりも詳しくて面白かった。（18 歳・女性）
M : 今日は、特別ゲストが二人来てくださった。日本に留学してくるぐらいだから、富裕層なのかと思っていたら、案外普通にバイトしていたりして、親近感を覚えた。物事の考え方もすごく違うというわけではなさそうだった。（21 歳・男性）
S : 今回の授業は、中国人の留学生の方が本になって話を聞いて質問をしました。普段、外国の方の話を聞く機会があまりないので、気になることが聞けて良かったです。出身の国が違っても共通の話があって楽しかったです。（18 歳・女性）

HL のメリットは､J の指摘するように｢その人の反応を実際に見ながら話を聞くことが出来る｣点にある。｢生きている図書館｣と言われる所以でもあり、現実社会でのコミュニケーション能力の養成に貢献するところが大である。

また、K の指摘するように、通り一遍の自己紹介ではわからない詳細な応答内容から、その人を深く理解することが出来るという利点もある。インタビューのしかたを学ぶ機会ともなる。

前項の異文化理解とは逆に M の記述するように「富裕層なのかと思っていたら、案外普通にバイトしていたりして、親近感を覚えた」とあるように共通点を見出して、心理的な距離が近くなるという効用もある。日本にいる中国人をみたら誰でも「富裕層」と思ってしまうようなステレオタイプ（固定観念、先入観、思い込み）に陥らずに、ありのままの「本」の素顔に接することができる。

4-3-7.　尊重し合える関係

O：人間図書館では、話を聞いている人に分かりやすい説明をするというのがとても大変だと思いました。留学生の方々は、頭がいい分しっかりと話せてとても尊敬しました。（18 歳・女性）

d：生きている本として来ていただいた中国人留学生のお二人に質問するとき、みんなかなり漠然とした質問をしていて応えづらいのではないかと一人で焦っていたけど、二人ともすぐ答えていて、頭の回転が速いのかなと思った。それと、日本語を学ぶのは、すごく難しいはずなのに、中国の大学四年間だけでそこまで読み書き、聞き取り、発音ができるようになっているということに感心した。（22 歳・男性）

Z：中国の留学生の自己紹介、そして質問の応答に迷いがなく、上手く日本語を伝えておられ、結構上手だなと思いました。学力面では相当一生懸命に頑張っているなと思い、自分も改めて見習おうと思いました。（28 歳・男性）

O のように「しっかりと話せてとても尊敬しました」とあるように、日本人の多くが人前でのスピーチに苦手意識を持っていて、しっかりと堂々と話すことに自信を持てていない。

d は「中国の大学四年間だけでそこまで読み書き、聞き取り、発音ができるようになっている」ことに驚き、感心しているが、それは日本の大学での外国語教育がうまくいっていないことを物語っており、そのような背景があっての感想と言えるであろう。

Z は、「学力面では相当一生懸命に頑張っているなと思い、自分も改めて見習おう」という気持ちになっている。看護師養成のプログラムも 20 科目以上の試験科目があって、学力面での努力が相当必要とされているが、さらに勉学を動機づけることにつながったと思われる。

4-3-8.　驚いたこと

U：今日は、お二人のお話がとても面白かったです。文化の違い、感じ方の違いも驚きましたが、私が驚いたことは、二人とも将来が、まだ、はっきり決まっていないことでした。留学するからには、何か大きな目標（就きたい職業）が聞けるかと思っていました。ですが、将来がとても楽しみな二人だと思いました。（38 歳・女性）

h：驚いたのは日本に来る理由がなかったことです。なにかあこがれや目標があって来たのかと思っていたので驚きました。（18 歳・女性）

Q：来てくださった中国人の二人の日本語のうまさに驚き、面白かった。出身国は違っても盛り上がるのは恋愛話なんだな、と思った。（26 歳・女性）

W：中国からの留学生の方の語学力に驚きました。と、バイトまでされていることにも驚きました。知らない土地で、知らない人ばかりの中で、働くことが不安に感じなかったのかな？と思いました。ヒューマン・ライブラリーでの質問もできる人間図書館は、素敵だなと思いました。聞く側にも、わからないことを聞けると、より話もしっかり聞け、頭に残りやすいと私は思いました。（33 歳・女性）

U も h も「日本に来る理由がなかったこと」「二人とも将来が、まだ、はっきり決まっていないこと」に驚いている。「留学するからには、何か大きな目標（就きたい職業）」があるはずと予測したり、「なにかあこがれや目標があって来た」のかと思っていたので、その予測が外れて驚いたのであろう。

実は、二人とも大学院博士課程への進学を考えていたのだが、HL 実施時点では、まだ決心がつかずに大いに迷っていた時期であった。「迷っている」と胸のうちをさらけ出して「自己開示」することにためらいがあったのであろう。大学院修了後は「金儲けがしたい」などと応答していた。当日の二人も将来計画が漠然としていた中で、「読者」としての参加者が全員看護師を目指して奮闘中であるのを目の当たりにして、真剣に自らの将来目標について考える契機となったと思わる。その点は、「本」のためにもなった活動であったと言える。「自己開示」については、次のような記述も見られた。

4-3-9. HL での「本」の「自己開示」

a:今日は、中国人留学生にたくさん質問をしました。初めはとても緊張していましたが、後半になるとホワイトボードを積極的に活用して質問に答えてくれて、少しずつ心を開いてくれているようで嬉しかったです。自分と年も離れた人にこういう活動を通して質問をしていく方が楽しいと思いました。私は人といて会話がはずまない時は、よく質問をしてしまいます。それとは違う感覚で面白かったです。(18 歳・女性)

他者に対しての「自己開示」は、簡単なことではないが、短時間のうちに上記 a のように「少しずつ心を開いてくれている」との実感が持てたことは、構成的グループ・エンカウンターに通じると思われる。

4-3-10. 次への期待

I:今日は、中国の留学生の人が二人来て、話したけど、とてもおもしろかった。国籍は違うけど、考えとか意見とか色々参考になったので、ぜひまた来てほしいです。(18 歳・女性)

R:今日は、中国から留学生の方が来られてて、質問を一つではなく、たくさん聞いてみたかったです。大学生は、確かにバイトをして、勉強をして大変だと私も思いました。(26 歳・女性)

g:日本と中国の違いや何で山口に来て学ぼうと思ったかなど、様々なことが聞くことが出来て良かったです。国が違っても同じ人間なので、他国の人と交流して、色んな文化、歴史など様々なことが聞けたらいいなと思いました。また、こういう交流をしてみたいなと思いました。(20 歳・女性)

HL という形で交流することが参加者の興味関心を喚起し、次へのステップにつながることが期待できる。実際には、翌週 88 歳になる年配の方に「本」役をお願いして、続編を実施したり、クラスメートの中から「本」になってもらいたい人を三人投票で決めて、その人たちに「本」として登壇してもらった。紙幅の都合上、続編の展開の報告は別の機会に譲ることとする。

5．まとめと今後の課題

以上のように、看護専門学校での「人間関係論」の授業の一環として実施された「人間図書館」の内容を開示して分析を試みた。時間と対象と内容を構成して、自己開示と他者理解、相互理解を促進する構成的グループ・エンカウンターのエクササイズとしても活用できることがわかった。HL の活動を体験することによって、参加者の認知の修正と拡大が期待できる。外国人留学生を「本」にすると「異文化理解」が促進される点に着目して、今後も HL 課題として取り組んでいきたい。

（注）「本」になってもらった「語り手」のプライバシー保護のために、私的な個人情報にかかわる答えたくない質問には、「ノーコメント」と言って答えなくてもいいと実施手順の説明の際に参加者の前で伝えた。

【参考文献】

上野恵司編(1997)『中英日韓対照・分類中国語基本語彙』白帝社
金若静著(1987)『同じ漢字でも』学生社
群馬大学社会学科坪井ゼミ(2012)『ココロのバリアを溶かす―ヒューマンライブラリー事始め』人間の科学社
飛田良文・呂玉新著(1987)『日本語・中国語意味対照辞典』南雲堂